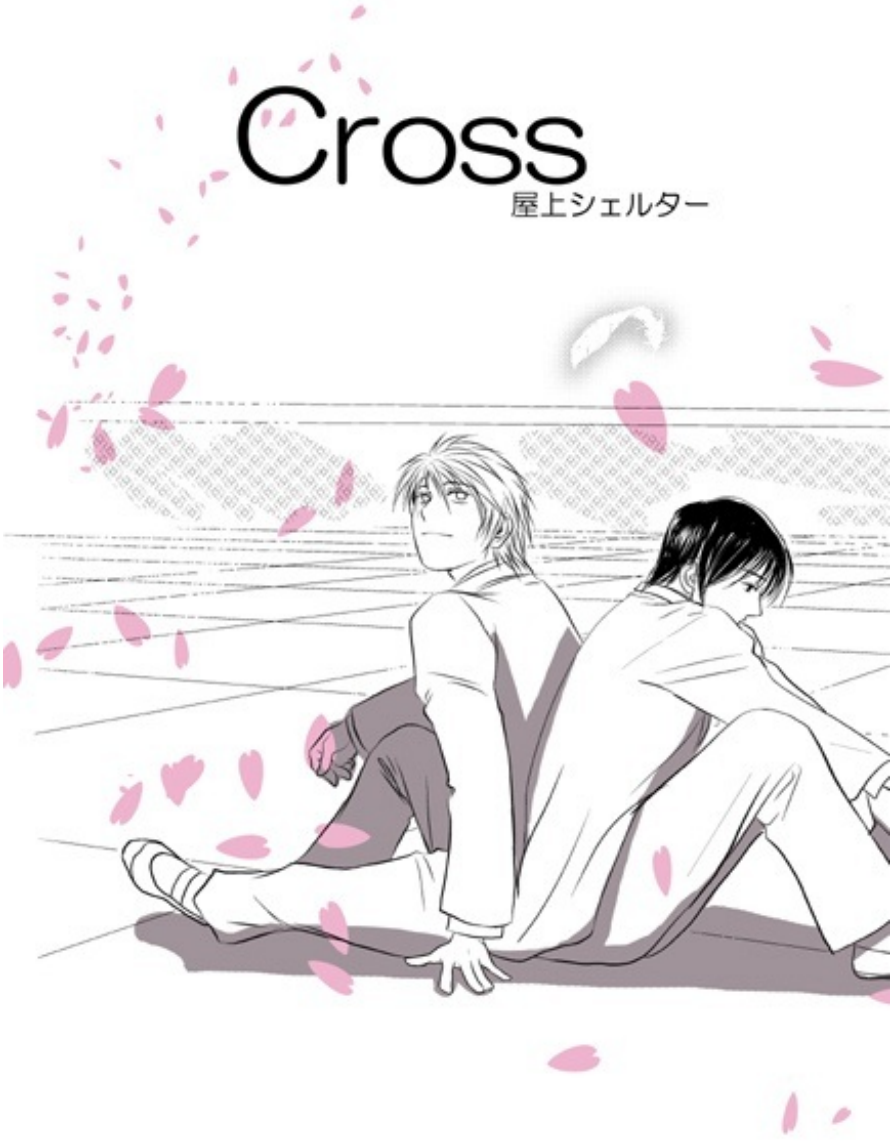
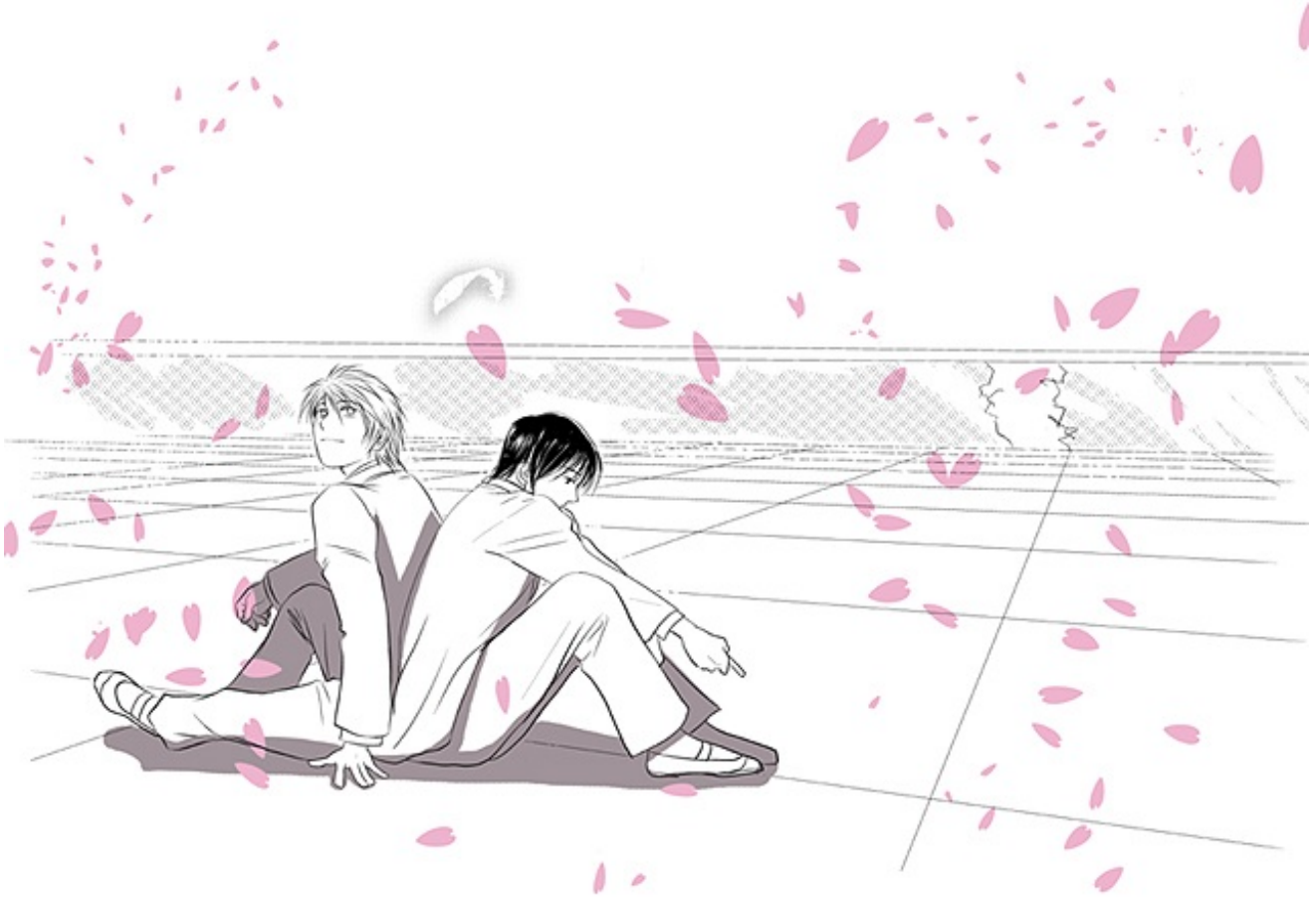
Cross

屋上シェルター





「友達」じゃ助けられなくても
「天使」なら助けられるかもしれない

Cross
十字架，はりつけ台
（誓言･祝福などの時空中または
額･胸などの上で切る）十字の印
交錯
受難，贖罪

1

四月下旬。
春の遅い僕の町では、卒業式にも入学式にも間に合わなかった桜が散り始めていた。
　寒い地方だから仕方ないとはいえ、気の利かないことだと父兄が漏らしているのを耳にしたことがあるが、桜だってなにも人間の門出を祝うために花をつけているわけではないのだから、いい迷惑だろうと思う。
　植物が花をつけるのは、実を結び、己の分身を次世代に託す種を作るために他ならない。　それ以上でもそれ以下でもないのに、人の都合で勝手な思いを託される。

　遠くけぶる山脈から吹き降ろしてくる強い風にあおられ、一斉に花びらが舞い上がるのを、高二になったばかりの僕は、そんな醒めた感情で校舎の屋上から眺めていた。
　……実際、僕自身がそんな大人たちの託す勝手な思いに疲れ切っていたのだ。
　両親が開業医だということもあり、僕も周りも当然そのあとを継ぐものと思っていたから、幼稚園から始まって、小、中と周りの大人たちの言うままにがんばって彼らの期待に応えてきた。
　けれど、周囲は僕がどんなにがんばったところで、さらにその上の結果を求めてくるだけなのだ。

　僕はいつまで……どこまで……走り続ければいいんだろう？

　高校に入学してみると、さすがにそこは県下有数の進学校だけのことはあって、田舎の公立中学校程度の優等生はたちまち凡人へとそのポジションを落としていった。
　いや、僕個人はそれでちっともかまわなかったし、むしろ到底太刀打ちできないような秀才たちを目の当たりに毎日を過ごしていれば、かえって正面きって彼らと成績を競うなどという立場にない、現在の自分は気楽ですらあった。

　でも、親や教師はそれを認めてくれない。
「何を手を抜いているんだ」「全力でぶつかればかならずまだ伸びる」「お前は負け犬になりたいのか」
　つくづく思う。学校というところは大人の期待に応えられない子供の人格をみとめてくれない場所なのだと。

　僕はため息とともに眼下に街を一望できる眺めのいい南側のフェンスから身を離すと、屋上を横切って北側のフェンスへと歩いていった。

　錆だらけの金網フェンスの破れ目から外へ踏み出す。

　校舎の北側、すぐ向こうは校舎と同じ高さの切り崩した山肌だ。人に見咎められることもない。
　もっとも、姿を見られたとしても、この暮れかけた薄闇の中では「学校の怪談」のネタにされるだけだろう。　事実、うちの高校には去年飛び降り自殺をした生徒の幽霊が屋上に出るという噂が伝わっていたりする。
　大きめにあと一歩。六十センチも踏み出せば、そこから先は三十メートルの自由落下が待っている。

「……死んでみようかな」

　もちろん、口にしてみるだけでさらさらその気はないが、あと少しの「その気」さえあれば、自身でこの身を終わらせることができるという事実は、暗くて安っぽい快感を僕にもたらしてくれた。
　それはつかの間、この世のどこにも身の置き所のないような落ち着かない気持ちを忘れさせてくれる。

　そんな時、彼を見つけた。

　下界を吹き抜ける花吹雪がふいにその舞をやめ、一瞬視界が開ける。
　そこは校舎と削られた山肌の間の狭い裏庭で、じめじめと日当たりも悪く、ほとんど人が入り込むことなどない場所だった。
　その片隅、廃物置き場となっている小屋の外に置かれたベンチにそいつは座っていた。

　染めてでもいるのか、色の薄い髪をした男子生徒だった。
　生まれつきの茶髪ですら黒く染める事を強要されるような古臭い体質が生き残っているこの学校では珍しい。

　力なく両腕で自分の肩を抱いて俯いている姿は、何か痛みをこらえているようにも、泣いているようにも見えた。

　ふいに、彼が顔をあげた。
　まともに目が合った……ような気がする。　かなり距離はあったのに。

　彼は無表情に僕の方を見つめる。
　僕は眼を離す事が出来なかった。

　その無言の視線の交錯は、風に乗って再び舞い狂いだした薄紅の吹雪に遮られるまで続いた。

　ふいに、我にかえりぞっとする。
　しらずしらずのうちに、足は屋上のコンクリートの途絶えるギリギリまで踏み出していたのだ。
「冗談じゃ、ない。」
　吐き捨てるようにつぶやいたのは、そうやって強がりでもしないと、膝がくだけてそのまま落ちてゆきそうな自分を誤魔化すためだった。

２

　翌日、僕は昨日見たあいつを探していた。
　とは言っても、積極的に他人に尋ねたり、他の教室を覗き込むようなことはせず、ただ、校内を目で探していただけの事だが。
　少なくとも、同じクラスでないことはわかっている。
　しかし、一学年十二クラスもある上、新学期が始まったばかりとあっては、同学年かどうかすらよく判らないのが実情で、僕はまる一日を無為に過ごす事となった。

　夕方。結果の出ない事に費やした時間が急に惜しくなる。
　我ながらつまらない遊びにはまり込んでしまったと。
　そう、冷静になってみれば、彼を探してどうしようという考えはなかった。ただ、あの瞬間思い込んでしまったのだ。彼を探さないと……と。

　探してどうする？　目が合ったように見えたと言っても、おそらく彼の方からは逆光になっていて僕の姿なんか見分けられたはずがないのだ。　フェンスの外側にいたのがわかったかどうかも怪しい。
たとえ、それらが判ったところで言い訳ならいくらでもできる。だから、僕が徒に自殺の真似事などしていたことを口止めする必要すらないのだ。

「ばっからしぃ」
　子供じみた事に熱中していた自分に向かって吐き捨てる。
　そして僕は放課後、屋上へ向かった。

　家には帰りたくない、塾にも行きたくない、さりとて他に時間をつぶせる場所を知らない。
　一人になれる場所がない。
　我ながら不器用で面白みのない奴だと思う。
　そんな自分に唯一残された、自由に息をすることの出来る場所。
屋上はそんな僕の避難場所になっていた。

　基本的に大体の学校は教師の目の届かない場所での不祥事を防ぐため、屋上へのドアには鍵をかけているものだと思う。うちの学校も例外ではない。
　僕は去年の秋、体育祭の実行委員をしていて、屋上からの垂れ幕を撤去する仕事をもらった。
　そのとき、屋上へのドアの鍵をついうっかりポケットに入れたまま帰宅してしまった。

　もちろん、それに気付いた僕はすぐに担任に電話で事情を話し、翌日すみやかに鍵を返しにいった。
　ただ、その前に勝手に合鍵を作ったことは黙って。

　だから、職員室のキーボックスに正規の鍵がある以上、屋上には誰もいないはずで……。
「あれ？」
　いつものように鍵を取り出し、ドアノブに差し込む。が、鍵はシリンダーの解除される手ごたえもなく、くるりと回ってしまった。
（開いてる？）
　恐る恐るノブを回し、細めにドアを開けてみる。
　とりあえず見える範囲には人影はない。
　もう少し大胆になって一歩屋上に踏み出す。　と、北側のフェンスに誰かが寄りかかっているのが目に入った。
　咄嗟に引き返そうとしたが、向こうがこちらに気付いてしまった。

　先客は昨日のあいつだった。
　色の薄い髪を風に吹かせながら、長めの前髪がうっとうしいのか、目を細めこちらを見つめている。
　しばし、気まずい沈黙が流れた。が、先にそれを破ったのは向こうからだった。
　僕から目を離すことなく手招きをする。

ぼくは一瞬躊躇したものの素直にそれに応じ、彼のもとへと歩み寄った。
間近に見る彼は僕より少し目の位置が高かった。
彼はしばらく無言で僕の頭からつま先までをじろじろと眺め回すと
「びびった……」
と、全然無表情のままつぶやいた。

「は？」
面食らった僕が問い返すと、彼は少しふてくされたような顔をして僕から視線をはずし、あさってのほうを向きながらぽつりとつぶやいた。
「幽霊かと思った」
あらためて耳にするその声は、いままでなんとなく想像していたよりも低く、ぼそぼそとこもっていた。
「え？」
「いや昨日、俺、幽霊見たんだ」
「ここで？」

「うん」
「で、わざわざ確かめに来たわけか」
「うん」

　どうやら、その幽霊の正体が僕である事には気付いていないようだった。
　ちょっと安心した僕は、物好きな奴……そう言いかけてある事に気が付いた。
「どうやってここ開けたんだ？　鍵、職員室にあったけど」
　僕は秘密の隠れ家を取り上げられないために、いつも屋上へあがる前にはこっそり職員室のキーボックスを確かめていた。

「あ……う～」
　彼はしばらくばつが悪そうにもじもじとシャツの裾をいじっていたが、やがて観念したように胸ポケットから見覚えのある鍵を取り出してみせた。
「合鍵…内緒で作ったのか」
　僕が問いただすと、素直にこくんと頷いてみせた。
　自分だけの秘密の場所が実はそうではなかったという軽い失望と同時に、同じような事をしていたこいつに、僕はちょっと親近感をおぼえた。

「内緒にしといてくんない？」
　俯いたまま奴がぼそっとつぶやく。
　ちょっと不貞腐れたように自分の足元に視線を落としながら、シャツの裾を弄んでいる姿は図体の大きさに反して妙にガキっぽく見えておかしかった。
「そうだな……」
　僕がもったいをつけてそこで言葉を切ると、奴は俯いたまま上目遣いで僕の顔色を伺った。
「約束してもいいけど、その前に学年と名前、教えろよ」
　条件付きで提案を呑む事を示してやると、奴はあからさまに安心したような、無防備な笑顔を見せた。
「アリガ　ユタカ。二年八組。アリガは有る無しの有に年賀の賀」
　聞いた事のない名前だった。もっとも僕は一組だから教室自体かなり離れているし、何せ人数の多い学校だ、面識がなくても無理はない。
「戸波　要（となみ　かなめ）。同じ学年だったんだな」
「あんたも二年かぁ」
　有賀はそういうと、ますます嬉しそうに笑ってみせた。

「ところで、おまえはなんで屋上の鍵なんて作ったんだ？」
　彼の持っていた合鍵が昨日今日作られたものでないことは、さっき一瞥しただけでもわかった。
「あ……これは……」
　つぶやいて言いよどみ
「あんたこそ、なんでだよ？」
「え？」

逆に質問されてしまった。

「なんで今ごろ急に屋上なんかに来たんだよ？　見たとこ、特に用事があった風でもないじゃん」
　まいった。ぬぼーっとした外見と、ガキ臭い表情に騙された。こいつ、意外と鋭い。
「僕は……」
　誰かに見つかった時のために用意していた、当り障りのない理由を告げようと口を開きかけ、ふいにいたずら心が頭をもたげた。

「実は幽霊なんだ」
　にやりと笑い、そう答えた。
　笑い飛ばされると思った。いや、そうやって冗談にまぎれさせてしまおうと思っただけの事だったのに、有賀の顔がみるみる蒼ざめていった。
蒼ざめるだけでは足りず、じりじりと後ずさりをはじめる。

「おい……」
　僕が一歩踏み出す。と、有賀は首をふるふるふりだした。
「有賀……？」
　名前を呼ぶと、彼は飛び上がりそのまま出口へ駆け出した。速い。
　すぐに後を追ったが、僕が出口から顔を出したときにはもう、階段を駆け降りる足音すら聞こえなかった。

「……変な奴……」
　そんなに幽霊が苦手なのに、なんだってわざわざ出たとおぼしき場所までのこのこ調べにやってくるかね？

３

　それからしばらく、僕は屋上へ足を運ぶ事はなかった。
　なんのことはない、連日雨が降っていて、屋根のない場所へわざわざ行く気になれなかっただけの事なのだが。
　そして、特別探す事はしなかったものの、やはり校舎の中で有賀の姿を見かけることはなかった。

４

　数日振りに訪れた屋上には、またも先客がいた。
　色の薄い髪をした、図体のでかいガキ……有賀だった。今日は屋上の真ん中で仰向けに大の字になっている。
「よお……久しぶり」
　奴は僕の姿をみとめると肘をついて上半身を起こしながら、暢気に手を振ってみせた。
　先日の怯えっぷりが嘘のように屈託がない。
「なにしてんだよ」
　秘密の隠れ家を荒らされた苛立ちと、妙な別れ方をしてちょっと心配していたあげくの再会で、僕の声は少なからず棘を含んでいた。

「なんだ、やっぱりあんた生きてるじゃん」
　有賀のそばまで歩み寄ると、奴は僕の靴を指差してにやっと笑った。
「足、あるもんな」
　それだけ言うと、有賀は再び仰向けに寝転がった。
　僕もなんとはなしにつられて、奴の横に体育座りで腰を降ろす。

「今日も幽霊探しか？」
　僕が問い掛けると、有賀は寝転んだまま空へ手を伸ばしながら
「いや、空を飛ぼうかと思って」
　と、答えた。
　こいつ頭大丈夫なのか？と、有賀の顔を覗き込む。
「まあ、戸波もやってみなって」
「うわっ、ちょっ……！」
　いきなり身を起こした奴に驚いて、飛びのいた僕はコンクリートの継ぎ目に踵をひっかけて、床に仰向けにひっくりかえってしまった。とっさに受身の真似事なんかしてみたものの、勢いを殺しきれず軽く後頭部をぶつけて一瞬星が散る。

「いーから。そのまま上見てみなよ。飛んでるみたいっしょ？」
　しかし、有賀はそんな僕におかまいなしに再びとなりに仰向けになると空を指し示した。
　僕は観念して渋々と奴のでっかい掌の先へ目を凝らす。

　高台の学校の、さらに屋上。

　おそらくこの町で一番空に近い場所から見上げた何も遮るもののない空は、視界いっぱいに広がっていて、本当に宙に浮いているような錯覚を催させる。いや、寄るべき地面が存在しない分その景色は僕にとってはとても不安定で…高く、いや、むしろ深く。何処までも続くかに見える大気の層は嫌でも自分が地球と言う泥の塊に張り付いているちっぽけな存在である事を思い出させた。
そして、不意に空に向かって落ちてゆくような感覚に襲われ、僕は慌てて跳ね起きた。

「戸波？」
　傍らでは有賀がきょとんとした顔で不思議そうに僕を見上げていた。

「……気分が悪い」
　僕はそう告げると、立ち上がっていつもの北側のフェンスに歩いてゆく。

　高みから見渡せば、あれほど舞い狂っていた桜ももはやすっかり葉桜へと変わり、ふわふわと幻想的だった風景を、くっきりした現実のものへと染め替えていた。
　また、狂ったように暑い夏が来る。
　そして秋が来て、冬が来て……季節に追い立てられるままに流されていく自分も見える気がする。

「あぶねーぞ」
　いつのまにか、有賀が傍らにいた。
「悪かった」
　そう言ってすまなそうに俯く。どうやらさっき強引に空中飛行につき合わせたことを詫びているらしい。

「有賀、あそこに座ってた」
　僕が、はじめて有賀を見たベンチを指差すと、奴は一瞬ぽかんとしたのち「ああ」と了解した。
「幽霊は戸波だったんか」
「なんで幽霊探してたんだ？」
「……友達になりたかったんだよ」
「え？」
　短すぎる僕の問いに、有賀はあいまいな笑みを返しただけだった。

5

　それ以後、僕と有賀はちょくちょく屋上で逢瀬を重ねた。
　…と、言うのもなんだが僕が屋上へ行くと、たいてい奴が先に居るので、なしくずしに一緒に居る事になるだけの話なのだが。

　僕はと言えばあいかわらず、成績の上昇に限界の見えてきた自分と、なおも上を目指させようとする大人たちの間で息苦しさを感じていたし、おそらく、そういった僕の余裕のなさみたいなものを周囲も感じ取っているのか、親しい友達も出来ず、そういった諸々に耐えられそうになくなると屋上へ逃げてきていた。

　有賀は、たいてい『空を飛ぶ』とか『天使になる』と称して仰向けに寝転び、視界いっぱいの空を眺める以外は特に僕の邪魔をすることもなかった。
　僕も、そんな有賀のそばで持参した本を読んでいるか、デジタルプレイヤーで音楽を聴いているか。
　二人の間には、時おり他愛のないやり取りがあるほかは、僕のイヤホンを分け合って一緒に音楽を聴いているくらいで、ほとんど会話はなかった。
　本当は僕自身にはまた、フェンスの外へ出て、あのスリルに身を晒したい欲求があったのだが、奴が居ると止められそうな気がしてそれは出来なかった。

　はじめ僕は密かに恐れていたのだが、有賀は互いがなぜこの場所に来るのか、どんな思いを抱いているのかを問いただすようなことはなかった。
　僕が有賀を詮索しない限り、有賀も僕に余計なことを言ってこない。
　傷つく事も傷つけられる事もないまま寄り添える、生ぬるくも居心地のいい関係。
　いつのまにか僕の中で勝手にそういうルールが出来上がっていて、有賀と屋上はワンセットで僕の避難場所の象徴になっていた。

　有賀は時々小さな声で歌を歌っていた。
　はなから他人に聞かせるためのものではなく、今聴いている曲をぼそぼそとつぶやくように歌っていた。
　そんな時の奴は完全に空を飛んでいるらしく、半分眠っているような目をして空を眺めながらうっすら笑っていた。
　普通なら、大の男が薄ら笑いを浮かべて鼻歌を歌っている図など、気味悪いとしか思えなかっただろうが、そういう時の有賀は……もともと色素の薄い奴ではあったけれど、なんというか、

存在自体の透明度が増したように感じられて、僕は密かに綺麗だと思っていた。
　そんな僕の視線に気がついたのか、有賀がいきなりこっちを向いた。

「あ…有賀はなんで天使ごっこなんてやってるのさ」
　とっさの照れ隠しになにか言わねばと、つい、かねてからの疑問を口走ってしまった。
　しかし、奴は特に気にした風もなく
「天使だったら、助けられるだろ？」
　と、答えた。
「助けるって、誰を？」
「……友達」
　それって、僕の事？　とは図々しくて聞けなかった。
　有賀も、また何もなかったかのように歌を再開する。

『友達』
　そう呼んでくれる奴がまわりにいなくなって久しかったから、そうであればいいという思いがなかったわけではない。
　けれど、自分ひとりの空回りだったらさらに寂しくなるだけなので、これ以上の追求はしないことにした。
　今現在、どういう形であれ、僕が僕のままでもそばに居てくれるのは奴だけだったから。

6

　それは、ほんのちょっとした思い付きだった。
　その日、僕は教室からチョークを持参した。
　屋上に出ると、有賀はいつものようにちょっとだけ起き上がって「よう。」と手を振る。
　いつもはそれに頷き返して、ドアのかげに腰をおろす僕が、今日はそのままずかずかとそばまで歩み寄ってきたのに気付いて、有賀は再び上半身を起こした。

「そのまま、そのまま」
　起き上がろうとする有賀を押し留めて僕は奴の周囲に絵を描きだした。
「？」
　しばらく怪訝そうにチョークの軌跡を見守っていた有賀だったが、しばらくして僕が描こうとしているものの形に気がつくと「…すっげぇ」とつぶやいた。

「おし！」
　三十分ほどのち。大作を描きあげた僕が、かがんでいた上半身を起こして手をはたくと、有賀はいつもの子供っぽい無防備な笑顔で
「なあ、なあ、似合ってる？」
　と、嬉しそうに言って寝転んでみせた。
「まあまあかな」
　言ってあらためて『作品』を見渡す。

　寝転んだ有賀の左右には大きな白い翼が描かれていた。

「やっぱ、幽霊より天使のほうがいいよな」
　有賀がぼそっとつぶやいた。

7

　五月の下旬頃から雨が多くなってきた。　梅雨のはしりなのかもしれない。
　僕は嫌な事があっても屋上に逃げる事も出来ず、いらいらと日々を過ごしていた。
　あいかわらず、有賀を屋上以外で見ることはない。
　この頃から僕は何とはなしに、奴はいわゆる不登校みたいなものなのだろうと思っていた。
　学校に来る事は来るが、なんらかの理由で教室にはなじめず、保健室なんかで授業を受けているんだろうと。
　この時期はテストも多く、あまり他人の事を気にしている余裕がなかったせいもあって、奴についてそれ以上の推測はしていなかった。

　だが、梅雨の晴れ間、久々に屋上で奴と再会してみてやっぱり不登校というのはこの大きな犬ッコロみたいな男には似合わないなと認識を改めた。
　そして、自分で思っていた以上にこいつの存在を求めていた自分に気がつく。

「よお」
「うん」

　いつものやり取りがいつもどおりに行なわれたことに、いつも以上に安堵している自分。
　有賀はあいかわらず、屋上のど真ん中にごろんとねっころがっていた。
　が、その日はなんだかいつもより元気がなかった。

「戸波が描いてくれた羽……雨で流れちまった」
　有賀は済まなそうにそう言うと、身体を起こして今まで翼の描いてあったあたりのコンクリートを掌でなでた。

「……ばぁか」
　思いもかけない奴の落胆振りに少々面食らった僕は、そう言って俯いた有賀を置いて出入り口へ取って返した。
「戸波？」
「消えたらもういっぺん描けばいいだけの話だろう」
　振り向かなくても有賀が満面の笑みを浮かべたであろう事は察しがついた。
　僕はそのまま階段を降りて、手近の教室から白いチョークをありったけ掴んで戻ってきた。

　案の定、有賀は僕の手の中のものに気がつくと、ぱあっと顔を輝かせた。ストレートな奴だ。
「今度は、前よりもっと大きいの描いてやるよ」
　そう言って僕は膝をつくと、ごりごりと屋上の床に白い翼を描きはじめた。

　誰かのために、何かをしたいと思うなんて、なんだか随分久しぶりな気がした。
　自分がしたことで誰かが喜んで笑顔を向けてくれたことも。
　それは、なんだか胸の奥の冷たくしこっていた部分に暖かいお湯をかけられたような感覚で、ほっとするような心地よさがあった。

　有賀は僕に何も求めない。
　そして、与えたものには無償の笑顔を返してくれる。
　僕を僕のまま受け入れてくれている。
　僕は奴の喜ぶ顔がもっと見たかったんだと、コンクリートに膝をつき、手をチョークで汚しながら改めて奴がここに居てくれたことの意味をかみしめていた。

「なあ、なんで天使なんだ？」
　描きながらふと思い立って、いつかもした問いを再び投げかける。
「……助けたかった奴がいたんだ」
　結構な間を置いてから、ぽつんと答えが返ってきた。
「それが友達？」
　僕は手を止めることなく訊きかえす。
「……う～ん？」
「違ったのか」
「何も言わずに行っちゃったからねぇ」
　有賀の声が震えていた。泣いているみたいに。
「それでももう一度会いたかった。幽霊でもいいからちゃんと向き合って力になりたかった。でも友達じゃ足りないならもう天使にでもならないと、大事な奴を助けるとかは無理なのかなぁって……だからオレは天使になりたいんだ」
　なんだか聞いていて胸が苦しかった。
　この暢気な犬ッコロのような男がそこまで思いつめている、かつての奴の友人とやらにに僕は嫉妬していた。
「有賀、バカ？」
　内心の苛立ちと共にチョークをコンクリートに擦り付け、手元から目を離すことなく僕は吐き捨てる。
「あぁ？」
「少なくとも……僕は救われたよ。有賀に会って」
　視界の端で有賀が息をのむ気配がした。

「どこにも居場所がなくて、誰にも必要とされてなくて、自分なんて居ても居なくても世の中かわんないとか思ってて。毎日すげぇしんどかったけど、有賀は僕と居てくれたじゃん。
有賀はたまたま一緒に居ただけかもしれないけど、それでもずっと一緒に居てくれたじゃん」
　なんだか支離滅裂だなと思いつつ、一旦吐き出した思いは止まらなかった。
「僕なんかじゃ友達にはなれないかもしれないけど、有賀が天使になりたいっていうなら、僕はなんでもしてやるよ」

　ずっと抱えていた思い。
言うだけ言って、でもその反応が怖くて僕はひたすら手元のチョークに集中する。
しばらくのち、背中の方で小さなため息が聞こえた。
「……ありがとな」
　有賀の声が耳元で小さく囁いた。
「戸波はとっくにオレのこと、天使にしてくれていたんだな」
　振り向くと間近に有賀の顔があった。
　ふわりと。近づいてきた奴の唇が僕に触れた……ような気がする。
「なっ……？」
　突然の奴の行動と、錯覚にも思えたその感触の意味を確かめようと僕が口を開きかけたそのとき。

「何をしているっ！？」

　無粋な学年主任の叱責に僕らの空間は引き裂かれた。

８

　普段の素行に問題はなく、特に喫煙等の明確な非行があったわけでもない。ただ単に放課後、立ち入り禁止の屋上で絵を描いていただけ。ということで、僕は教師から三十分ほど厳重な注意をされた上で解放された。

　有賀は……。
　有賀は　「いなかった」

　学年主任が屋上の出入り口から舞い込んできた木の葉に気付き、階段を上がってみると、そこに居たのは無心で地べたに絵を描いている僕ひとりだったという。
　僕自身、怒鳴られた時反射的に有賀の方を振り向いたが、そこには誰もいなかった。

　混乱した頭の中、なんとなく……そんなものだったのかもしれないと感じた。
　奴は精神的に参っていた僕が作り出した幻みたいなものだったのだと。
　僕みたいな、価値の無いつまらない存在をそのまま受け入れてくれるような都合のいい奴なんているはずもなかったのだ。
　まいったな。そこまで煮詰まってるつもりはなかったんだけど。
　一度、ちゃんと病院にかかった方がいいかもしれない。

　二階の職員室から一階の玄関に降りる足が重かった。

　と、不意に何かが僕の意識をかすった。
　僕は階段の途中で立ち止まり、何が自分の注意を引いたのか、改めてあたりを見回す。
　階段の壁にはさまざまな掲示物。
　その中には校外の各種大会で好成績を収めた生徒の表彰状もいくつかあって……。

「二年八組　有賀　夕鷹」

　去年の陸上県大会での短距離準優勝の賞状にその名前はあった。
　額の中には二位のメダルを首にかけたジャージ姿のスナップも一緒に収まっている。そいつは色の薄い髪をして、犬ッコロみたいに屈託のない笑顔を浮かべた……

　僕は、飛びつくようにしてその額をはずすと職員室へとってかえした。

9

　去年担任だったと言う古典の先生から教えてもらった奴の現在の住所は、市内の公立病院の一室だった。
　なんとか面会時間終了三十分前に辿り着く事のできた僕だったが、やはり、いざとなるとノックをためらってしまう。
　会ってどうしようと言うのだろう。

　有賀は、去年屋上から飛び降りた同級生を助けようとして大怪我を負い、現在も入院中との話だった。
　落ちてくる友人を受け止めようとして潰される形になり、頭部を強打した結果、脳に大きな損傷を引き起こしたらしい。もちろん、勝手に病院を抜け出して歩き回る事など出来るはずも無いと言う。

　このドアの向こうに居る有賀は、僕と屋上で過ごしたあの有賀と同じなんだろうか？
　確かに部屋のドアにある名札は、賞状と同じ「有賀　夕鷹」となっているけれど。

　やはり、出直そう。
　そう考えて踵を返したとたん、大きなビニールバッグを抱えた女の人とぶつかりそうになった。
　あわててあやまる僕を、女の人はじっと見詰めて「……夕鷹のお友達？」と尋ねてきた。
　ああそうか、制服で……と気がつくより早く、女の人……有賀のお母さんはドアを開けて僕を病室へと引っ張り込んでしまった。
「この頃はもう、訪ねてくださる方も見えなくて……。来てくださってありがとうね」
　早口で僕に礼を言うと「ゆっくん、お友達」とベッドの方へ声をかけた。

　そこには、まぎれもなくあの有賀がいた。
頭部を手術するために一旦剃ったりなんかしたんだろう、髪はかなり短かかったし、屋上で会っていたときより肉がそげてひとまわり縮んだように見えたけれど、あお向けに横たわったその顔はいつもの有賀だった。
『よお』
　僕に気がつき、目だけがこっちを向いた。

「まだ自力で起き上がったり喋ったりはできないですけれど、こちらの言う事は理解できていますから」
　お母さんが囁くように説明する。
　けれど、何を話せばいいと言うんだろう？
　僕はベッドに歩み寄った。
「あ、せっかくだからお茶でも飲んでいってくださいね？　コーラとかのほうがいいかしら？」
　有賀のお母さんはそういうと、僕が遠慮するのにもかまわず、財布を持ってあわただしく部屋を出て行った。

　残された僕はベッドの傍らにひざまづくと、改めて有賀と視線を合わせた。

　有賀はゆるゆると僕のほうに手を差し伸べる。僕も恐る恐るその手をとりあげ……。

　二人の歯と歯がぶつかってがちんと鳴る。
　不器用な僕らは、今日はじめて触れ合った。

（了）

2010/03/14 コピー誌にて発行
a bullet.
http://homepage2.nifty.com/cafetap/
文・絵/純友良幸
plastick.dog@gmail.com

ＣＲＯＳＳ～屋上シェルター～

http://p.booklog.jp/book/51704

著者：純友良幸
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/su-min55/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/51704

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/51704

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ